

現在の「学級がうまく機能しない状況」(いわゆる「学級崩壊」)の 実態調査と克服すべき課題

—現在の「学級崩壊」とかつての「学級崩壊」との比較から 課題を考える—

増田 修治

研究実績の概要

学級崩壊の状況を調べる予定だったが、アンケート調査が出来なかった。そのため、学級崩壊経験者の数人に話を聞くことにした。その中で、「学級崩壊」の原因は、大きく分けて5つあることがわかった。

- ①子どもたちの成長が様々になってきており、一斉授業になじまなくなっている可能性があるのではないか。
- ②親の学校への不満をきっかけとして、教師が病んだり疲れたりして、学級が崩壊する。
- ③子どもの学びについての配慮が欠けており、子どもの理解度を無視した授業の積み重ねで崩壊した。
- ④授業中、落ち着いて座ってられず、机の上を飛び回ったりする児童で授業が成立しなくなった。
- ⑤一人をかまうと、みんながかまって欲しい児童が多く、問題を起こせばかまってくれると考える児童が増えた結果、授業規律が乱れ、崩壊した。

また、学級崩壊の2年生の学級を視察すると同時に、授業を実施することができた。担任教師が、「何をどう手をつけたらこの落ち着きのなさがおさまるのか分からない」との訴えを受け、学校長の許可を得て学級に入ることができた。

1時間目の算数の授業を視察した。すると、教師の話を受けない子どもが1/3近くおり、問題が解けると飽きて別のことを始める子どもが数人

いた。何をしたらいいかわからず問題を一応ノートに書くが、式や答えが出せない子どもが半数近くいた。

筆者は、国語の授業を実施したのだが、音読が出来ない子ども、特に拾い読みの子どもの割合が2割以上いた。他の子の発言を全く聞かず、騒がしくて発言が聞き取れない場面もあった。

授業視察と授業実施を通して、見えてきた子どもの問題点は次の通りである。

- ①「何をどこまでやるか」といった指示が通りにくく、全体に指示が浸透しない。
- ②2年生でクラス替えをしたが、1年生の時から学級が崩壊しており、授業の規律が全く身につけていない。
- ③他の子が発言した時には黙って聞くという、学習態度の一番の基本が出来ていない。
- ④ノートのとり方がひどく、一マスに一文字入れず、マス目を無視してノートに書く子どもがほとんど。
- ⑤授業が成立していないため、学力が定着しておらず、それが学習への集中をさまたげるという悪循環に陥っている。

これらのことから、筆者は次のことを提案した。

- 1、「何をどこまでやるか」をもっと明確にし、チョークの色を分けて、問題を解くなら赤チョークなど、自分たちのやるべきことを「わかる化」する。
- 2、発言している子どもがいたら、「もう一度言ってみて」と言わせて、「〇〇ちゃんが言ったことわかった？」と他の子どもに聞くことを繰り返す。
- 3、ノートは、思考の跡を記録するもの。ノート指導を、学年で統一して進めていく。
- 4、授業の中で、3つのことが同時に行われていたため、子どもがとまどっていた。学力が低い状況では、難しい。15分ずつにパッケージ化して、一つひとつがわかったかを確認していく。
- 5、家庭的な困難を抱えている子どもに対して、もっと個別なアプローチを試みるようにする。

こうした提起を受けた担任の先生は、できる範囲で頑張り、なんとか座って授業を全員が受け、発言に横やりを入れるものの、互いの意見を聞き合うという所までは持って行くことができた。

学級が崩壊すると、「何をどうしていいのか」「どこから手をつけるべきか」が、わからなくなる。アンケートを通して、今の子どもの全体像を明確にすると同時に、個別のケースにあたっていく必要性をますます感じる事ができた。